第17回企画展「水城大野城調査研究事始め」
（会期:平成25年11月19日(火)～26年１月13日（月・祝））解説シート②

百年前の水城調査と研究者たち

はじめに

大宰府史跡の主要な史跡の一つ水城跡は、今を去ることちょうど100年前の大正２年（1913）に初めて調査が行われ、これが大宰府史跡の学術的な調査・研究のはじまりとなりました。また、このころから昭和初期にかけて、水城・大野城をめぐって幾人かの研究者によって、学術的な調査が行われました。ここでは、大正２年に行われた水城の調査の概要と、当時の研究者を紹介します。

１　大正２年の水城調査

大正２年７月、福岡を訪れていた東京帝国大学の黒板勝美（くろいたかつみ）は学術調査のため、宗像沖ノ島への渡航を試みようとしていました。25日夜半、福岡県庁水産課所属の玄海丸により博多湾を出航しましたが、折からの強風により引き返さざるを得ませんでした。旅程の都合もあって、沖ノ島行きを諦めた黒板は筑紫郡水城村（現在の太宰府市吉松）にて国鉄線の拡幅工事で、水城の開削が行われている報を受け、太宰府天満宮参詣の途上、水城の調査を行うこととなったのです。

工事が行われていた場所は、現在のＪＲ鹿児島本線水城駅のすぐ南側、水城跡の堤本体と交わる箇所に当たります。鹿児島本線は明治22年（1889）に九州鉄道として開業、この時に既に水城の堤は開削されていましたが、黒板が来福していた際に水城駅新築及び離合のための複線化に伴って工事が行われたのでした。

黒板は水城の調査に際し、当時観世音寺に滞在していた美術学校卒業生の久富寿年を同行させ、開削された水城の土層断面のスケッチを描かせました。これが現在、東京大学日本史学研究室に所蔵されている「筑前大宰府水城の一部切掘図（きりほりず）」（以下「切掘図」）です。

切掘図には、中央やや左側に土塁中心部分の上成（じょうせい）土塁（土塁の上段部分）を、そして両側にさらに低い下成（かせい）土塁（土塁の下段部分）を描いており、鹿児島本線の東側の壁面にあたります。注目すべきは露（あら）わになった断面に水平方向に褐色と暗灰色の線を描き、土塁の積土を表していることです。さらに図をよく見ますと、土塁上部が薄い褐色や明灰色、すなわち砂層で積土が表現されているのに対し、土塁下部（下成土塁の高さ）は濃い褐色や暗灰色で表現されています。これは黒板も気付いているように、植物の枝や葉が敷かれた層、つまり近年の調査で確認された敷粗朶（しきそだ）のことと思われ、現在では脆弱地盤（ぜいじゃくじばん）の補強のために施工される大陸由来の技術と考えられているものです。

また、この時の調査の写真も残されています。写真には切掘図とは反対側の断面を掘削している様子が写し出されています。黒板は一度目の調査の後の８月25日に九州帝国大学の中山平次郎と共に再度現地調査を行っており、写真は二度目の調査の際に撮影されたものと思われます。

この調査後も水城跡の調査が数多く行われてきましたが、土塁断面を大々的に調査をすることができたのは後にも先にもこの時だけです。そのことを考えても、100年前の調査がいかに重要であるかが分かります。

筑前大宰府水城の一部切掘図（久富寿年筆・東京大学文学部日本史学研究室蔵）

大正２年の水城開削の様子（國學院大學提供）

2　約百年前の水城・大野城の研究者たち

大正２年（1913）に水城跡の調査が行われて以降、昭和初期にかけては、史蹟名勝天然紀念物調査もあって、水城跡さらには大野城跡についても、調査が行われていきました。次に、それらの調査を行った５人の研究者を紹介します。

（１）武谷水城（たけや みずき）（1852-1939）

御笠郡水城村（現在の太宰府市）に福岡藩士の子として生まれ、陸軍軍医を勤めました。予備役後の大正２年（1913）には筑紫史談会を創立、機関誌『筑紫史談』を発刊する等、郷土史研究の発展に寄与しました。また水城大堤の石碑の建立にも尽力する等、太宰府の史跡の保護と重要性を最も早くに訴えた人物の一人でした。

（２）中山平次郎（なかやま へいじろう）（1871-1956）

九州帝国大学教授として病理学を専門とする傍ら、考古学研究者としても活躍しました。発掘調査は行わず、現地踏査と表面採集、史料の解析等を通じ、採集遺物と遺跡との関係を明らかにするという方法で研究を進めました。中でも「元寇防塁」を命名したことや、鴻臚館の位置を特定したことはとても有名です。大正２年（1913）には黒板勝美と共に水城土塁断面の観察調査を行い、その成果を報告しています。

（３）黒板勝美（くろいた かつみ）（1874-1946）

東京帝国大学教授。古代史・古文書学を専門とし、『国史大系』の校訂にも携わりました。そして、大正２年（1913）には水城跡を訪れて土塁断面の調査を行い、これが水城・大野城にとって初めての学術調査となりました。古文書学の体系化を進めた人物として有名な一方、古社寺保存会、国宝保存会、史蹟名勝天然紀念物調査会などの委員として戦前における全国的な文化財の保存に尽力しました。

（４）長沼賢海（ながぬま けんかい）（1883-1980）

九州帝国大学教授。中世史を専門とし、松浦党や海賊など日本の海事史を中心に研究を行いました。また福岡県史蹟名勝天然紀念物調査委員として昭和５年（1930）頃を中心に水城跡の木樋の発掘調査や、大野城跡の踏査を行い、水城木樋や大野城城門の構造などを世に公表しました。晩年は太宰府に居を構え、通古賀王城神社・筑前国衙説を主張しました。

（５）鏡山 猛（かがみやま たけし）（1908-1984）

九州大学教授。後に九州歴史資料館初代館長。大宰府研究・神籠石研究を中心とした歴史考古学研究を主体的に行いました。学生時代の昭和５年（1930）には委員として九州考古学会の設立の中心となり、九州考古学の礎を築いた人物でもあります。昭和43年に刊行された『大宰府都城の研究』は、大宰府政庁・水城・大野城・観世音寺・条坊等の大宰府史跡を網羅的に研究したもので、後の発掘調査の指針となりました。

（学芸調査室　岡寺　良）

水城大堤之碑
（太宰府市水城）

「筑紫史談」第 75 集より転載
武谷 水城

「福岡市博物館常設展示室（部門別）解説 287」より転載
中山 平次郎

「国史大辞典」より転載
黒板 勝美

「国史大辞典」より転載
長沼 賢海

「九歴だより」No.28 より転載
鏡山 猛

編集　　発行：平成25年11月19日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM
〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575　FAX 0942-75-7834
URL http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/